もっと！たたらクイズ！

Q1：なんて読む？

「鎏」　「銑」

どちらもたたらに関する漢字です。

Q2：金屋子神社の屋根には「　　」の文様が描かれている。
①イチゴ②リンゴ③ミカン④ブドウ

Q3：金屋子神が降り立ったとされる桂の木はどんな香りがする？
①はちみつ　②わたあめ　③バター
④チョコレート　⑤メロンパン

正解は現地で確認してみよう！

利用案内

開館時間：9:00-17:00（最終入館16:30）
休館日：毎週水曜日（祝日と重なった場合は翌日）
　　12月29日～1月3日
入館料：一般310円、高校生210円
　　小・中学生は無料

おすすめ観光ルート

米子空港→和鋼博物館
車　：35分
電車：1時間29分（乗り換え）

和鋼博物館

↓

安来港と安来の町並み

↓ 車で15分

安来節演芸館
安来はどじょうすくい発祥の地。ここではプロの唄と踊りを楽しめる。希望者は踊りの体験も可能。

↓ 車で4分

月山富田城
戦国大名・尼子氏が拠点とし、難攻不落の城と呼ばれる。月山富田城のある広瀬は城下町であり、レトロな雰囲気が残る。

↓ 車で28分

金屋子神社と西比田の町

徒歩すぐ

さぎの湯温泉
白鷺がここから湧き出る湯で足の傷を癒したことが名前の由来。武士も身体を休めたくつろぎの温泉地。

ちょっと寄り道
徒歩すぐ

足立美術館
絵画のような広大な日本庭園と横山大観をはじめとした貴重なコレクションが見所。

ちょっと寄り道
車で12分

安来市加納美術館
平和を願い続けた画家・加納莞蕾（かんらい）のコレクションを展示

日本遺産１「出雲國たたら風土記」

1-1. 和鋼博物館、日本刀復活の旅

刀剣乱舞、鬼滅の刃――。国内外で日本刀ブームが起きています。

しかし、刀の素材となる「玉鋼」は、今となっては島根県のみで行われている日本古来の製法「たたら」でしか作れません。島根県には「和鋼博物館」を基点に、たたらに焦点を当てた日本遺産が点在しています。ぜひ刀のふるさとを訪れ、ルーツを感じてみてください。

来ると安らげるところ、「安来」

―「出雲国風土記」

たたらがなければ
日本刀もない！？

日本刀の鍵を握る「たたら」を学べる場所

和鋼博物館

かつては日本各地で行われた製鉄技術である「たたら製鉄」。たたら製鉄とは、砂鉄と木炭を用いて鉄を生産する日本古来の技術のことで、足で踏んで炉に空気を送る装置を「たたら」と言うことが由来です。現在は島根県奥出雲町の「日刀保（にっとうほ）たたら」が日本唯一の操業となっています。

なぜ「たたら」が日本刀の鍵を握るのか？

実は、たたら製鉄によって生み出される「玉鋼（たまはがね）」が日本刀を作る際の素材となるのです。そして不思議なことに、日本刀は玉鋼でしか作れません。たたらが日本から消えることは、日本刀の伝承が途絶えることと同じなのです。

和鋼博物館では、まずビデオで炎の上がる「日刀保たたら」操業の様子を見ます。映像から、たたらの壮大な雰囲気を感じ取れます。展示室の資料には「日刀保たたら」の村下（むらげ・たたら操業のリーダー）が監修に関わったものも多く、想像を掻き立てます。歴史ロマンを感じる刀の展示もあり、フロントに連絡すれば実際に手に持つことも可能です。たたら製鉄は決して昔だけのものではなく、包丁などの製品で知られる「ヤスキハガネ」がその流れを現代にも引き継いでいます。機械などの材料としても利用されており、展示からも意外な使い道が発見できるかもしれません。玄関横にあるたたら製鉄の送風装置「天秤ふいご」を動かしたり、ミュージアムショップ守谷宗光でヤスキハガネ製の刃物を購入してみたりして、たたら製鉄を体感してみませんか？

たたら製鉄はサステナブル？

今現在大きな注目を集めているSDGs。実はたたら製鉄も「持続可能な開発」と呼べることをご存知でしょうか？

たたら製鉄が盛んだった当時、原料となる木炭の確保に向け、森林伐採が大規模に行われていました。これだけを聞くと、環境のことを考慮していないのでは？と思われるかもしれません。しかし，人々は森林を失わないために、約30年周期での計画的な伐採を行うことで、循環的に土地を利用してきました。まさに持続可能な開発を行っていたのです。また、中国山地では砂鉄を採取するため山を切り崩しその土砂を川に流すことによって砂鉄を採る「鉄穴（かんな）流し」という方法がとられていました。こうした動きの中で形成された土地は田畑として有効活用されており、島根県を代表するブランド米「仁多米」は奥出雲の棚田で生産されています。「出雲そば」や「奥出雲和牛」にも棚田は関係しており、たたらは島根の食を豊かにしているのです。

→関連スポット：飯梨川と赤江の新田、ト蔵新田

豆知識

たたらから生まれた日本語

「じだんだを踏む」は地たたらを何度も踏んで空気を送り込む様子から、「代わりばんこ」はたたらを踏む作業員「番子」が交代して作業にあたったことが語源とされています。

「ハガネのまち　安来」その理由とは？

安来市が「ハガネのまち」と呼ばれていることをご存知でしょうか？「たたら」のキーワードをもとに、その理由をお伝えします。

安来のまちが栄えたのは安来港があったからです。「たたら」で生産された鉄鋼の積み出し港として安来港と安来のまちは繁栄しました。 その後、鉄鋼会社が安来の地で設立されたことをきっかけに、高品質の鉄鋼を生産するまちとして知られるようになります。これが「ハガネのまち」と呼ばれる理由です。

現在の安来のまちを歩けば、旧雲伯鉄鋼合資会社社屋、国の登録有形文化財である割烹山常樓（やまつねろう）など、歴史ある建物が多く残っていることが分かります。また、和鋼博物館ではまちの歴史を学ぶことができます。あなたも「ハガネのまち安来」を歩いてみませんか？

たたらの神様が安来に。

島根といえば神「在」月。八百万の神々が集まる地でもありますが、実はたたら製鉄の神様も存在します。その名も「金屋子神（かなやごのかみ）」。古事記にも日本書紀にも出てこないマニアックな神様ですが、影響力は多大。そんな金屋子神社の総本社がなんと安来市にあるのです。金屋子神の鎮座する桂（かつら）香る山に一度訪れてみてはいかがでしょうか。？

日本刀を残すために。知る人ぞ知るたたらドラマ

日本で行われた鉄作りは大陸の製鉄技術を模倣したため、鉄鉱石を原料にしていました。しかし、のちに国内でも取れる砂鉄が鉄鉱石の代わりに用いられ、砂鉄の加工に合った製鉄方法、すなわち日本独自のたたら製鉄が確立されていきました。特に中国山地では良質で豊富な砂鉄が取れたため、中国地方においてたたら製鉄は盛んに行われました。江戸時代に入ると、鉄の需要増に応えるべく出雲地域ではたたら製鉄によって大量の鉄が作られました。このとき、安来港は鉄の積出の役割を担いました。この地域から全国に輸出された鉄によって、日本の産業が支えられてきたといっても過言ではないでしょう。

しかし、明治時代になると西洋式の製鉄方法が流入します。この製鉄方法は大きな動力によって稼働し大量の鉄を生産できたため、職人の技量に依存するたたら製鉄はピンチを迎えます。大正時代の末頃には最後のたたら場が閉鎖され、ついに日本のたたらは断絶してしまうのです。

再び脚光を浴びるのは太平洋戦争のとき。軍刀の需要が増したものの、刀はたたら製鉄によって生産される玉鋼が材料でなければ作れません。そのため、島根県に「靖国たたら」が創業します。しかし，敗戦に伴い再度断絶してしまいます。

戦後、日本刀の作製には戦時中に作られた玉鋼の残りが使用されていましたが、昭和40年代に底を尽きてしまいます。そこで昭和52年「公益財団法人日本美術刀剣保存協会」によって、靖国たたらの跡地に「日刀保たたら」が開設され、たたら製鉄が復活しました。

2度の断絶と復活を経て現代に生きるたたら製鉄。今では主に全国の刀鍛冶に玉鋼を供給するため、奥出雲町で操業されています。そして、安来市では今でもハガネのまちとして鉄に関わる産業が息づいているのです。